

■ 本書の結論

どのような概形印象採得法であろうと、

概形印象は

“術者が意図する個人トレーや
基礎床を製作するために必要な

解剖学的ランドマークを

含む印象”でなければならない

「本書の結論」の解説

わが国で紹介されているさまざまな総義歯製作法の最終治療目的は、総義歯の維持安定を図ることである。つまり、総義歯装着者が日常生活において、「総義歯で噛んで飲み込める」、「総義歯が外れない」、「総義歯で話せる」ことの達成にほかならない。ところが、さまざまな総義歯製作法が紹介されているがゆえに、それぞれに賛否両論があり、結果として臨床家はどのような総義歯製作法を用いるべきか、そしてどのような概形印象採得法を用いるべきかに翻弄されてしまう。これはいまに始まった問題ではなく、以前から存在し、かくいう筆者も若き日に翻弄された一人であった。

各総義歯製作法は、術者が意図する最終義歯を製作するための総義歯製作法であり、それに伴う概形印象採得法が存在する。しかしながら、共通見解として、「どのような概形印象採得法であろうと、概形印象は“術者が意図する個人トレーや基礎床を製作するための解剖学的ランドマークを含む印象”」であることがわかる。

総義歯製作で重要なのは“咬合”であるが、本書はあえて“総義歯の概形印象”に焦点を当てる必要があった。事実、不十分な概形印象から製作された研究用模型から、さらに個人トレーや基礎床が製作され、総義歯製作工程に悪い影響を及ぼしている。このような状況下で総義歯を製作する歯科技工士が、歯科医師に再印象を訴えたくても訴えられない背景があることを、われわれ歯科医師は理解しなければならない。近年、個人トレーや基礎床を製作するために必要な解剖学的ランドマークが採得されていない概形印象が多いことを調査した論文が発表されており、まさに現状を物語っている。

本書から、さまざまな概形印象採得法だけを学ぶのではなく、「どのような総義歯製作法であろうと、概形印象は“術者が意図する個人トレーや基礎床を製作するために必要な解剖学的ランドマークを含む印象”」でなければならないことを念頭におき、さまざまな観点から無歯顎の概形印象を理解してほしい。そして、現在不可能とされている不動粘膜（咀嚼粘膜）と可動粘膜（被覆粘膜）が混在する無歯顎の光学印象が当然のように行われる時代に備え、歯科医療においてアナログとデジタルが共存するいまだからこそ、無歯顎の概形印象を確認してほしい。

2019年11月
編著 前畑 香